

臺灣見聞記

× × 新聞記者 加藤 主計

昨年夏、暑中休みを利用して臺灣へ遊びに行つた。歸つてから田中さんにその話をしたら、何か書いたらどうかと勧められた、で何か書いて見ませう、とは云つたものゝいる、仕事に追はれ、約束を果すことが出来ずその内に涼しくなつてしまつた。酷熱の苦しみから漸く逃れた頃になつて、而かも臺灣の暑い話などは讀む方でも迷惑なれば、又書く方も餘り氣が進まない、それで結局來年の夏にでも思出話として書かうと思つて机の抽出しに藏つて置いた。

だからこれから書かうとするのは實は昨年の古物である、従つてそれだけ興味を殺される譯であるが、歳が變つたからとて夏はやっぱり暑いやうに、去年見た臺灣と今年のそれとは大して變る譯ではない。その他理屈をつければ色々あるが、理屈は抜きにして兎も角、昨年の夏、臺灣を旅行して、私の目に映じたこと印象に残つたことを。簡単に書いて見ようと思ふ、只道路のことは餘り注意しなかつたので紹介すること出来ぬが、その點は悪しからず御了承を乞ふ。

花嫁に合ふ程の氣恥しさはなかつたが、初めて見る土地

だけに尠からず興味を持つて行くことが出來た、船が基隆の港へ入ると、赤や青で色彩された小船「ジャンク」が船を目掛けて群り寄つて來る、その有様は初めて臺灣を見る

目には、確かに珍らしいもの、一つであつた、岩壁と驛とが續いて居るので頗る便利が良い、餘り便利が良過ぎて基隆の街を見る機會が無かつた、然し一寸見た所、入混んだ港街だけに道路も不規則で、舗装もしてないやうであつたが、凸凹が少いので悪道の感じもしなかつた。

汽車の窓から見ると赤煉瓦の小屋が點々として續いて居る、何れも本島人の住宅だそうだが、臺灣では百姓でも赤煉瓦の住宅に住んで居るのだ。この赤煉瓦の小屋を除いて樹木や山川を通して見た風景は内地と大して變りはない、水田が多いので變り映へがしないのかも知れない、米食人種にとつては水田は平凡である、尤も基隆から臺北附近の暑さは東京と殆んど變りがない位である。

臺北へ着いた晩、友人且君に案内されて市内を一巡したが、臺北は公園の中の市街で盡きる、道路の立派なこと、街路樹の美しいことは、恐らく他に比類がなからう、街は城内と城外の二つに分れてあつて、城内と云ふのは總督府廳舎を中心にして諸官廳並官舎が大部分を占め、その一部

邦人の商人が商業街になつて居る、城外は本島人が主となつて居るが、その間には勿論邦人商店も交つて居る。城内と城外の境界は三線道路なるものに依つて區切られて居るのだが、三線道路と云ふのは一種の公園道路で所に依つて三十間幅の所もあれば又五十間位な所もある、その道路を同じ間隔をとつて三つに分け、街路樹——主として棕櫚の樹を以つて仕切られてある、その棕櫚は高さ二三間だが二間四方位に廣がり、葉も直徑三尺位の大きさであり、しかも密生して居ると云ふのだから實に見事なものである、その上兩側には直接建築物がなく、握若しくは垣の所もある、多くは樹木が鬱蒼と茂つて居るから全くの公園である、道路はアスファルトコンクリートで舗装した部分もあり、玉川砂利のやうな小砂利を敷いた所もあつて全部一様ではないが、何れも平々坦々として實に理想的の道路である、東京驛前や霞ヶ關附近の道路はこの三線道路に更に歩道をつけたやうなもので大層立派だが樹木の貧弱な點はお話にならない。

三線道路以外の道路も區劃整然として路幅も亦廣く、人道車道の區別は勿論、街路樹も茂り、復興計劃當時やかましく云はれた、角切りなどを施した十字街もある。しかし全部舗装してある譯ではなく小砂利を敷き詰めた部分も大分あるが凹凸などは殆んどない。これは重いトラックや自動車などが餘り通らぬ爲だそうだが、實際乗用自動車と云へば總督府と銀行會社に僅か許りあるのみで交通機關は殆んど人力車に限られて居る。その人力車なるものが又頗る安く一町平均一錢か一錢五厘位にしか當らぬのだから自動車などを持つて來ても到底競争にはならない。其他乗合自動車が主要部分間の聯絡をとつて居るが、これもホンの一部分であり、車臺も少ないから道路を毀すやうなことはない。面白とことには一時電車を敷設しやうと云ふ話もあつたが道路を毀すのが惜しいと云つてやめたさうである。

この市街は後藤子爵が民政長官時代に、舊市街に隣接して計劃を樹て、家一軒もない所へ、斯く立派な新市街を築き上げたものださうだが、當時の臺灣にすれば東京の復興

計劃以上に驚異的となつたであらう。それは兎も角として後藤子爵の偉大な事業はこの地に立派に残されて居る譯である。

二

困苦しいこと許りで少々肩が凝つて來たから一寸方面を變へやう。

友人と夜の臺北市街を散歩して居ると赤煉瓦の建物の中から乙な音が洩れて來る「君……藝者屋かエ料理屋かネ」と友人の肩を叩くといくら臺灣だつて赤煉瓦の藝者屋も料理屋もないヨ……素人が徒然に一曲と云ふ所だらう」と別に氣にも止めない、いくら徒然の一曲でも赤煉瓦と三味線では氣が遠くなりそうだ、しかし臺灣は赤煉瓦の街だ、これも臺灣情緒の一つにして置かう、嘉義街に青や赤のペンを塗たくつた貸座敷のあつたことをつけ加へて置く、但し臺灣人専門でかすら心配せずに……

こうしたことは終りに書くのが順序だが序だからもう少

し書かせて貰ふ。

大きな街には大抵内地人の藝者も居れば遊廓もある、立派な料理屋もある、これは内地と少しも異なる所はなく、敢へて不思議がる必要もない。殖民地と賣笑婦は不可分のもの位は皆さんよく御承知のことと思ふ。只内地と違ふのは臺灣人の藝者と臺灣人の遊廓と、それに臺灣人の淫賣窟だけである。これとても臺灣では當り前のことだから兎や角云ふ必要もないが、此處まで書いて來るともつと書かねば惜しいやうな氣がする。幸か不幸か賣笑婦の統計を持ち合せぬから數字は解らないが兎も角必要を充たすだけはあるに違ひない。娼妓の數丈けは少し古い統計だが大正十三年末のが——あるから參考の爲、掲げて見やう但し娼妓の數と道路の改良と何んの關係があるか、などと叱られては困る、娼妓も道路を歩く人間位に思つて軽く見て戴きたい。

内地人 本島人 朝鮮人 計

九四八 五九 五七 一、〇六四

臺灣の藝者や娼妓は養女として小供の時から育てられて

來たものが大部分を占めて居るが藝者になると立派な部屋を持ち、賣れつ子は金銀を散り飲めた寢臺を持つて居るさうである、そして外から招ばれると何處へでも出て行く、又客を自分の家へ連れて來る。それがパトロンでなくても差支へない所に味がある、時間に制限がなく、一度招ぶのが五圓だが安いものだ。

この外淫賣窟が至る所にあり何れも『貸席』と云ふ看板を掲げ、臺灣人の賣春婦を置いて營業して居る、薄暗い息づまるやうな家に跼い所で二三人、多い所になると七八人から居る。一夜の歡樂が五十錢内外と云ふのだから大抵中味も想像出来る、但し臭くて穢ないことは豚小屋以上である、だからこれ等賣春婦の九割迄は花柳病に冒されて居るさうだ。それでも臺灣人勞働者には無くてはならぬ歡樂場である尙最近蠻地へ行くと外來者を相手とする蠻人の賣春婦が居るさうだか、何んでも内地人がからかひ半分に變んな興味を呼び起し、金をやつたことから出來たのださうな余り感心した興味でもない。

さて又後へ戻るが、翌日自動車で淡水へ出掛ける、小驛それに續く村落は何れも赤煉瓦、赤煉瓦の家のみである。

自動車は水田を貫く坦々たる一直線の道を走る、道幅は二間乃至三間位しかないが、通行するものが駛く又凹凸がないので氣持ちが良い、兩側の水田には白鷺が群り下りて青田の中をほぜつて居る、小川の邊りには幼い童兒が水牛を遊ばせて居る、農夫は水田の中へ膝をつき、逼ふやうにして田の草取りをして居るのも面白く、總てが臺灣情景である。淡水は支那大陸と交通の繁かつた當時に於ける舊い貿易港で、今では當時の名残りを止むる舊い建築物が残つて居るに過ぎない。

街は淡水河口に面して細長く出來て居る、河岸沿ひに貫く一本の道路らしいものを除いては六尺乃至九尺位の露路である、しかもその露路たるや、地形が河岸より直ぐ高くなつて居るので急勾配の坂道となり、車などは通りそうも

ない、その上、石が洗ひ出されて凹凸だらけと來て居るから全くお話にならないこれが昔の代表的貿易港の市街と云ふのだから驚くが淡水は領臺後貿易港としての價値を殆んど失つてしまつたので其後全々省みられなかつたことにも依らう。それにしても往時に於ける支那人の道路觀念が如何に低かつたかを窺知することが出来る。又この一事を以てして臺灣の道路は我が國に歸屬後築造され、改良されたものであることも判る。

淡水で有名なのは英國領事館で、今から約三百年前西班牙が同港を占據した當時造られた城である、紅毛城と名付け、石垣の積み具合から建造物まで、總てが歐洲で見られる古城その儘である。それに續いて海岸近くに支那が明治初年に築造したと云ふ要塞があるが今は全く廢墟となり、練兵場の跡はゴルフリングとして臺北の紳商連に使用されて居る。この廢墟に立つて淡水の街を眺むる景色は全くの畫である、山と山との間を流れる淡水江——緑の森の中に聳ゆる赤錆の古代建築物は他所では一寸見られぬ風光であ

る、殊にその暮色は天下一品だと云はれたが時間の都合で早く引上げたのは遺憾であつた。

その夜、南部に向ひ、一足飛びに塀東に赴いた。塀東は最南部と云ふ譯ではないが鐵道の終點より二三驛手前であり、亞熱帯に屬するから臺北などとは比較にならぬ程暑い、此處へ來たのは臺灣で一番大きい臺灣製糖會社の工場を見るのが目的であつた、で早速工場に赴き出張所長の寛さんに案内されて場内を隈なく參觀したが、折悪しく製糖の時期ではなく、アルコールの製造を見たゞけで物足りなかつた、兎も角全島で十三會社、四十五工場、年産高八百

路 政 雜 感

産業立國を標榜する現内閣の施政として、我が路政の進展を策することは當然であるが、如何なる手段に依つて其

十二萬擔中、六十萬擔、即ち一割三分強は此處で出来るのだから如何に大工場であるか判る。更に臺灣製糖一つの會社について見るに全島十工場、年産二百六萬擔、と云ふのだから大したものだ、その上砂糖黍栽培地五萬餘丁歩を所有すると聞いては驚かざるを得ぬ、がそれよりもその五萬丁歩の耕地が殆んどロハで拂下げられたものだと言いたらこのセチ辛ひ世の中で腰を抜かすものが出るだらう。この一例で我れも我れもと利權亡者が臺灣目掛けて蟻の如くに集まる理由も判つたであらう。いくら砂糖會社のことを書いたつて儲からんからこの位で止める。(未完)

田 中 生

の實現を期するのであらうかとは吾人の重視した所であつた、近時新聞紙の報道する所に依ると可なり大きな計畫を